

高等学校速読教材に関する一考察

— 原文の改稿・発問が読解に与える影響 —

濱口 脩・秋山 直樹¹

(2002年9月30日受理)

Teaching Rapid Reading Materials in High School:
How Rewritten Texts and Questions on the Text Influence Comprehension

Osamu Hamaguchi and Naoki Akiyama

The reading materials in the English textbooks for Japanese high school students are often the rewritten version of the originals. In many cases, post-reading activities are added to those adapted materials. The purpose of this paper is to demonstrate and to analyse the effectiveness of the rewritten materials for the readers. Also, this paper discusses what post-reading activities should be like. There are some suggestions for these activities that have been introduced and tried in actual classes. Considering the fact that most of the reading materials on the text are rewritten, studying the materials through comparison with the originals can be rewarding for teachers.

Key Words: adaptation, post-reading activities

キーワード：改稿，読後活動

はじめに

本論考の目的は、高等学校英語教科書において比較的初期の段階に提示される速読教材の例を取り上げ、そこに見出される教材化上の問題点に考察を加えていくことである。具体的には原典に加えられた改稿や読後に与えられる設問などが読者の理解にどのような影響を与えるかに注目し、それらを学習者の実態に則して検討し、実際の授業から導き出された結果を分析することで評価することである。

拙論では筆者（秋山）の勤務する公立高等学校の第1学年において採用された教科書における速読教材を論考の対象とし、同校1学年生徒に対して実施した授業を基に論を進める。

題材観

本教材は課と課との間にいわば投げ入れ的に挿入されたものであり、時期的には夏季休業明けを目的に指導されるべきものである。該当の教材は、内容そのままの Rapid Reading というタイトルの下、3篇の笑い話から成っていて、うち2篇については指導書に原典が掲載されている¹⁾。3篇のタイトルはそれぞれが“A PLAY OF WIT”, “CLEVER LUGGAGE”, “KAIDAN” となっており、各篇とも語数にしてわずか200語に満たないショートストーリーである。語彙以外は既習の言語材料で構成されていて、学習指導要領に記された英語Iの内容「読むこと」の項にある「まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること」という言語活動を中心に考えて授業を行うのには適当な教材となっている。(APPENDIX 参照) またそれぞれの逸話に生徒の理解を助けるためと思われる挿絵がついている。

¹広島県立祇園北高等学校

改稿箇所とその検討

教科書に教材として取り上げられる英文に原典からの書き換えがある場合、そこには当然読み手にとって、外国語としての英語学習上利益となるような様々な工夫が盛り込まれているということが期待されるが、その逆に原文の単なる切り貼りによる簡素化や不十分な言い換えが原典が本来持つ魅力や味わいを打ち消してしまうことにつながりかねないことも十分に考えられる。特に文学作品等における改稿の持つ意味には重いものがあると思われる。さて、本教材についてはどうかであろうか。具体的に改稿箇所について論じてみる²⁾。

“CLEVER LUGGAGE” に関しては6箇所の改稿が見られるのみでほとんど原典のままの英文とみなしてよいが、細かく見ていくと、まず、書き出しの部分で、原典では単に Mr. White was at the window である箇所が Mr. White was standing at the window となっており、1語の挿入が見られる。これは、指導書に「イラストを補助として、ホワイト氏が間違った列車に乗ったまま、その列車が出発してしまったという状況を読み取らせる」とあるので、挿絵との整合性をもたせたものであろうか。第1文の持つ重要性はいうまでもないことであって、不用意な改稿は当然避けられるべきであるが、ここは読み手の理解を助けることはあっても損なうことはないと思われる。

次に Ipswich という地名が London という地名へ書き換えられているが、これはもし効果があるとすれば知名度のより高い都市名を起用することによっていわば生徒の読みに対する心理的圧迫を取り除いているということになるかもしれない。この場合ここでの地名がどうしても Ipswich でなければならない理由はなく、また高1生が普段使用していると思われる辞書で調べてもこの地名は載っていないケースが多いと考えられ、この語を調べた生徒には多少の不満や不安が残るであろう³⁾。一方 London であれば、まずほとんどの生徒が知っている地名であり、いわば細部にとらわれず読み飛ばしていく感覚が持てるのではないだろうか。だからといって London よりは確実に知名度の低い Cambridge という地名とその位置を知っている高1の学習者が果たしてクラスに何人いるだろうか。

put it in the train (原典) を put it on the train (テキスト)、あるいは You're in the wrong train (原典) を You're on the wrong train. (テキスト) に書き換えてあるが、この場合の両者の違いについては、例えば池上嘉彦氏の次のような指摘が参考になるであろう。「前置詞が適用される対象が何次元のものであるかは対象そのものの客観的な姿で決まるのでは

なくて、表現する話し手がそれを主体的にどう捉えるかによって決まってくるということである。例えば、〈電車〉と言う対象は、物理的には〈三次元〉存在である。しかし、‘in’をとって ‘in the train’ とも、‘on’をとって ‘on the train’ とも使われる。‘in’をとる場合は電車は客観的にそれがそうであるように三次元の対象として捉えられていて、乗客はそれによって規定される立体空間の内部にいるという姿になる。一方 ‘on’をとる場合は、電車は二次元的対象としてとられられており、乗客は平面の上に乗っている者という姿になる…こういう捉え方の違いから、後者の場合の電車は立体的な構造物としてよりは、乗客を乗せる(あるいは、載せる)機能を果たしているというところに重点が置かれている。』⁴⁾

That one's going to Cambridge. (原典) と This train is going to Cambridge (テキスト) の違いであるが、this は話し手にとって時間的あるいは距離的に近いものを指す場合に使用し、一方 that は他と比較して遠いものを指す場合に用いる。従ってこの場合の書き換えはポーターのすぐ近くを動き出した列車を指しているのだから、状況に合った書き換えとなっている。

A.L.T.⁵⁾ に感想を求めたところ、やはり、原典と改稿版二つの文章は almost identical ではあるが、改稿版の方が若干読み易くなっているのではないかと、というコメントであった。

次に “KAIDAN” についての改稿を分類すると以下のようである。

① 単語レベルの書き換え 5箇所

- a 動詞 took → got
continued → go on
- b 代名詞 we → I
- c 前置詞 the key of our room
→ the key to our room
- d 接続詞 unless → if...not

② 句レベルの書き換え 2箇所

- nearly three in the morning → midnight
- a short one → very short⁶⁾

③ 単語のカット 1箇所

- went out sight-seeing → went out

④ 文レベルの書き換え 3箇所

- But the men agreed to tell stories on the way up in order to kill time.

↓

But the men agreed to use the stairs. To kill time they decided to tell stories on the way up.

The next story kept them amused till they had

reached the 31 st floor.

↓

When the second man finished his amusing story, they had reached the 31 st floor.

all the time the other two asked him to begin

↓

The other two kept asking him to begin

極めて短い文において、計11箇所及びライトが施されている。このうち、①aについては読み手に与える影響は比較的少ないのではないだろうか。‘continued’の書き換えについても生徒にやや難解と思われる語彙を基本動詞+副詞の構造をもつ口語的な慣用表現に書き換えることで、文章の印象を和らげる役割を果たしているといえる。もっとも、①のbについては、登場人物3名の運命共同体的受難のニュアンスを多少損ねてしまっている感もあるようではあるが、②、③の書き換えの意図は判じかねるがこれらの部分について語の削除がこの英文を楽しむことを妨げることになるとは思えず、単に文章を簡略化して読み手の負担を軽減しようとするものと考えてよいように思える。しかし、ここで最も注目すべき改稿は④の文レベルでの書き換えであろう。読み手（ここでの対象は高1生）にとってのいわゆる読み易さという点で、改稿した英文の方にかなりの分があるように思える。他の箇所に比べてやや難解な文を、いわば噛み砕くようなかたちで書き換えることで、読み易さを作り出すことに成功しているのではないだろうか。ただ、欲を言えば、2番目の書き換えについては、原文の方が「31階まで登る間ずっと2人目の話を楽しみ続けた」というニュアンスが強く感じられ、2人目の話の楽しさが強調されている分だけ、3人目の話の恐ろしさが大きな落差を伴ってくるしかけになっているので、内容的には原文のままの方がよいともいえるが、全体を通して生徒にとっての読み易さを志向していて、速読に資するという意味では妥当な改稿が加えられていると考えられるが、この点については実際の授業で検証してみたい。

読後指導についての検討

この教材にはそれぞれ本文のあとにポスト・リーディング・アクティビティーが用意されている。各エピソードを読んだあとに展開されるべく用意されている活動は順に正誤問題、空所補充問題、英問英答である。（APPENDIX 参照）設問はいずれも本文を正しく理

解しているかどうかを確認するという域を越えないものであって、重厚な文学作品を読んだ後のようないわゆる深く普遍的な理解に繋がるような設問はない。もちろんそのような設問のあるなしは英文そのものの質やその英文を通して行われることが期待されている活動にもよる。確かに今考察を加えている三篇の笑い話はじっくりと味読するといったような類のものではない。まさに速く読んで、読んだ後でニヤリとできればそれでよいものであろう。だが、そうであるにしても読後の設問がこのレベルに留まってよいかという疑問は依然として残る。各エピソードに内包される機知を理解できたことを実感させるといった面では、若干物足りなさが残る設問ではないかという気がする。ポスト・リーディング・アクティビティーに関しては「ポスト・リーディング活動は他の活動同様、そのクラスの実情に応じた内容・方法が採用された方が効果的なものになる。教師自らが考え、工夫をし、そして判断した上でさまざまな活動を取り入れる。教科書の教材を受身的にこなすのではなく、実情に合わせてそれに手を加え改良する、あるいは新たな活動を積極的に生み出していくべきである」という指摘があり⁷⁾、以下この観点に立って、実際の教室で採用できそうな活動を提案してみる。そしてそれらを実際の授業に導入してみたい検証作業を実施してみるものとする。

例えば、第1話であればSwansonの最後のせりふを読者に創作させるような活動はどうだろうか。まさに「落ち」そのものを考えさせるというわけである。もちろんそのせりふはそれまでの文の流れに沿った上でストーリー全体をぴりっと締めるような性質のものでなければならない。この意味において、単に真偽問題に答えていくという活動より読みに対する積極性や主体性を生むことが期待されるのではないだろうか。

また、第2話についていえば、タイトルを伏せておいて、読後にこの話に適切なタイトルをつけさせるという活動はどうだろうか。笑い話のタイトルは「落ち」を凝縮するような寸鉄の言葉でなければならないはずである。その意味においてMr. Whiteの‘stupidity’を印象付けるには、与えられた要約文中の空欄に単にcleverという語を埋めるよりも、暗にMr. Whiteの愚かしさを際立たせるタイトルを導き出させようとする、あるいはそれに気づかせようとする試みの方が、学習者にとって話のポイントをついた読解を促すという面でも有効ではなかろうか。そしてそのタイトルにたどり着いた生徒には文の「落ち」を的確に理解できたことを満足感を伴って実感させることができるのではなかろうか。場合によっては原題よりもっと気の利いたタイトルが提案されるかもしれない。そのこと自

体優れた読みの結果であり、その場合にはクラス全体で両者を比較検討すればよい。

これらはポスト・リーディング活動であるけれども、あらかじめ課題を明らかにして読みに対する意識を高めようとするにもなるのでプリ・リーディング活動としての側面も持ち合わせているといえる。

第3話は原題“A Story Too Terrible”をテキストの編集者が「とても怖い話」＝「怪談」にかけてKAIDANと改題したものであるが、storyに「階段」という意味があることを押さえる指導がなければ、それはいわば画竜点睛を欠くことになる。単純ではあっても、辞書でstoryを引かせて「階段」の意味を確認させるくらいの作業はあってもよい。できればその後で“What is the tallest building in our city?”などといった謎かけをするくらいの気の利かせ方があれば（答えはもちろんlibraryであるが）、生徒はstoryという語の多義性を忘れまい。ところで、原題‘A Story Too Terrible’そのものにユーモアがにじみ出てくる仕掛けになっている。この点を話題にして読後指導するのも一考であろう。つまり、3人の男たちは43階にある彼らの部屋まで階段を歩いていく長い時間の退屈さをまぎらわせるためそれぞれがおもしろい話をするようになったわけで、その意味では彼らのする話の内容がamusingなものであろうとterribleなものであろうと意にならなっていることになる。ところが、43階の彼らの部屋近くまでやっとたどり着いたときに、「部屋の鍵を1階のポーターに預けたまま」だと白状した3人目の男の話は、1階から43階までの長い階段を上ってきた彼らの努力を一瞬にして水泡に帰してしまったと言う意味で‘too terrible’なのである。よって、原題の‘A Story Too Terrible’の‘terrible’には二重の意味が込められている。教室で原題を紹介する場合には、ここを学習者がまず第一に理解するように指導する必要がある。その上で学習者には‘KAIDAN’という改題との比較検討を促していくのである。

ユーモアとかウィットなどといったものは英米の文化的背景を反映する英語の底流を成す重要な要素である。本教材は英文を速読することでそれらに触れることを可能にするものである。指導をより効果的なものにするためにも読後（前）活動について検討してみることにそれなりの意味があるのではないだろうか。

授業での実際

以上述べてきた考察や提案に対する検証作業を、実際のクラスを使って実施してみた⁸⁾。まずは、原典と改稿版との比較についてである。これに用いた題材は

上述の“KAIDAN”である。同一クラスを、原典の英文を用いた読みを行うグループと改稿版の英文を用いた読みを行うグループに二分し、それぞれに同一の課題を与える。それらに対する解答を分析することにより理解度の違いを見る。課題は2通りとし、A群（クラス1, 2）においては最も注目すべきと考える改稿（上述の分類の⑤）が行われている部分についてそれぞれを和訳させるというごくシンプルな作業を課した。B群（クラス3, 4）においては読後、Answer in Englishに取り組みさせて、2と3に対する英答の正解率を比較してみた。なぜならこれらの英問は、改稿された個所の理解に対応している英問であるからである。なお、この群には速読性を確保するため読む時間に制限を加えた。

実験の結果、A群においては、原典の英文に対しては理解できていないもの（訳文の書けないもの）の割合が多く、訳文を書いている場合も誤訳である場合が多かったのに対し、改稿版の英文に対しては誤訳も中には含まれてはいたものの、正しい訳を含め何らかの訳文を書いているものの数が多かった。

一方、B群においても、英問2に対する正答率にこそほとんど違いが見られなかったものの、英問3に対する英答の正答率には顕著な違いが見られた。両クラスとも改稿版を読んで解答した生徒の正答率が、原典を読んで解答した生徒の正答率の倍であった。ポイントとなる箇所理解に大きな差が出れば当然ストーリー全体の把握にも直接的な影響が出てくる。この結果は、この作品での改稿の妥当性が支持されるデータのひとつと考えてよいのではないかと。

次に、前述の読後活動に対する提案に関して実際のクラスでの反応について報告する。試みた活動は第1話においては大学でドラマを勉強している主人公が放送局の面接で面接官の求めに応じて行った即興の寸劇での最後のせりふを予測させる活動、第2話においては自らの勘違いに気づかずポーターを叱責した男が逆にやり込められる話にぴったりのタイトルをつける活動であった。（もちろん教科書そのものにそれらは載っているため、授業では教科書は伏せそれらの部分を空欄にしたプリントを用いた。）最初の活動に対して出てきた答えは実に多様性に富んでいて、話の展開からして一定の線に沿った予測は容易であろうというこちらの予想とは裏腹にやや困難を感じた生徒が多かったようである。後の活動に対する反応としては“Wrong Train”とか“Stupid Man”, “Mistake”などのように直接的なタイトルをつけた生徒が多かった。しかし、いわゆる「正解」（教科書と同じ答え）またはそれに類する答にたどり着いた生徒は上記A群からB群までの

4クラス中とも複数名存在した。この活動後、教科書を開かせ答えを確認させると「なるほど」という声があがったり、笑いが湧き起るなどした。

両活動とも生徒からは荒唐無稽なものからこちらが求めているものまで様々な発想が出てきたが、あらかじめ課題を意識して読みに入っていくことができた点や、作品に対する深い理解を要した点において、単なる正誤問題や空欄補充によって理解を確認するよりもストーリーを楽しんだことになったのではないか。

おわりに

教科書に採用される教材のほとんどは何らかの原典に改稿を施したものであるという事実を考えると、教材研究の段階において、原典と読み比べた上で改稿個所の是非を検討してみるということにほとんど思いが至ってこなかったことをまずもって反省をせねばならない。わずかな書き換えでも仔細に検討してみると奥深さを持っているものである。

また与えられた読後活動は尊重し活用しつつも教材研究を踏まえまた現実のクラスの実情を考慮に入れながら、よりよい読後活動を模索してみることは有益であると思う。これらの視点は今後大切にしていきたいと考える。

APPENDIX

A PLAY OF WIT

A broadcasting company needed someone to help them. Swanson, a student who was studying drama at a local college, wanted the job and went for an interview. He was surprised to find there were many people waiting their turn.

His name was called and the interview began. The first question from the examiner was, "What are you studying at college?" "I write short dramas," was Swanson's answer.

"Then, will you make a short play here now?" asked another examiner. Swanson stood up and went to the door. He opened it and shouted, "Everybody may go home. I got the job!"

True or False?

1. Swanson was a college student who was studying drama.
2. A lot of people came to the interview for the job Swanson wanted.

3. Swanson shouted to the others because he had got the job

CLEVER LUGGAGE

Mr. White was standing at the window of a train in a station. He was going to London, and he was very angry. As the train began moving, an old porter came to the window.

Mr. White shouted angrily to the porter, "I gave you my luggage a quarter of an hour ago, but you haven't put it on the train. Why isn't it here? Where have you put it?"

The porter looked at Mr. White and said, "I looked for you everywhere, but I couldn't find you. Your luggage isn't as stupid as you are. You're on the wrong train. This train is going to Cambridge."

Fill in the blanks.

Mr. White was () with the porter because he could not find his luggage in the train. The porter said Mr. White was not as () as his luggage. Mr. White was on the () train.

KAIDAN

Three men came to New York for the first time. They got a room in a hotel. In the evening they went out and did not come back till midnight. The room they had taken was on the 43rd floor. "I am sorry, gentlemen," said the porter, "but the elevator does not work. There is something wrong with it. You will have to walk up to your room." This was bad news. But the men agreed to use the stairs. To kill time they decided to tell stories on the way up.

By the time the first man had told his story they had climbed up to the 14th floor. When the second man finished his amusing story, they had reached the 31st floor. At last it was time for the third man to tell his story, but he refused. He said the story he had in mind was too terrible — he simply could not tell it. They went on climbing, and the other two kept asking him to begin. At last they stopped and refused to go on if he did not tell them his terrible story. "The story I have to tell is very short," he said at last. "I have left the key to our room downstairs with the porter."

Answer in English

1. On what floor was the three men's room?
2. Did they use the elevator to go up to their room?
3. On what floor were they when the first two people had finished their stories?
4. Did the third man want to tell his story?

【註】

- 1) "CLEVER LUGGAGE" の原典は *Funny Stories* by L. A. Hill, Oxford University Press, "KAIDAN" の原典は 'A Story Too Terrible' in *English Anecdotes* by J. Laith である。
- 2) "A PLAY OF WIT" は原典が示されておらず不明であるので割愛する。
- 3) Ipswich という地名は例えば「ランダムハウス英和大辞典」, 「研究社新英和大辞典」あるいは「リーダーズ英和辞典」などの大型のものには記載されている。

ところで, Ipswich はイングランド Suffolk 州南部の年で州都であるが, Cambridge はそれよりずっと西方にある。おそらく話の舞台となっている駅とは, Ipswich を通る列車と Cambridge を通る列車の両方を利用できる駅ということになろう。しかも, 15分も前にホワイト氏は彼の荷物をポーターに預けたとあるところから, この駅は列車の始発駅の可能性が高い。London 市内であれば, King's Cross/St. Pancras 駅と考えられる。

- 4) 池上嘉彦「〈英文法〉を考える」筑摩書房 1999 41頁
- 5) イングランド・コベントリー市出身
- 6) これについても, 厳密には単純なカットとはいえないが分類上ここに加える。
- 7) 濱口 脩「文学を利用した英語教育一雨の中の猫を題材として」学校教育実践学研究, 2002 第8巻 159頁
- 8) 被験クラスは, 1学年9クラスのうち任意の4クラス(各クラス40名在籍)である。